

# 銃 砲 史 研 究

第 260 号

洋式砲術書にみる熟語の成立  
(後)

所

莊

吉

平成6年6月

銃 砲 史 学 会 編

## 洋式砲術書にみる熟語の成立（後）

所 莊吉

### 三、オランダ通詞による西洋砲術書翻訳の限界

前号に紹介した『砲術備要』及び『ボススキートレイコンスト国字解』は、幕命による最初の西洋砲術書であるばかりか、本格的なヨーロッパ軍事技術導入のあらわれであったといえる。しかるに本木正栄と石橋助左衛門がともにオランダ通詞として同役の立場にありながら、彼らの訳書を見る限りにおいては、呢懇の間柄にあったとは思われない。もし、両者が親密な交流をもって相互に補完し合えたとしたならば、少なくとも西洋砲術書に関する限りにおいて、より適切な翻訳語が生まれていたと想像できよう。

本木正栄や石橋助左衛門による訳業から三十年ほど後であるが、やはりオランダ通詞を家職としていた名村貞五郎元義（生没年未詳）の手によって、以撰・比喇阿児（*De Bijlader*）が一八二八年に著した原書（未発見）が翻訳されており、『蘭法戦船火礮秘抄』十二巻本として知られている。この訳書の翻訳年代については確実な記録がないものの、天保十年（一八三〇）頃に訳了したものと有馬成甫博士は推定されている。しかし、ここでの用語がまだ熟していないことを見ると、博士の推定年代より溯るものと考えてもよいだろう。なおこの訳書は、「精雅堂藏板」とある野紙に清書されていることから、出版を試みた版下本の形跡も窺えるが、その後は、安政四年（一八五七）に再編集した三巻本『遠西軍艦砲要』と題する写本しか伝えられていないので、天保年間に板行はされなかったようだ。

さて、この『蘭法戦船火礮秘抄』からみた用語として次のものが挙げられるが、訳語としてはまだ生硬さから脱していないと同時に、本木や石橋の訳書をほとんど参考にしていなかったことが察せられる点に興味がもたれる。

アゲトルタールリス〔跡綱〕、アス〔櫃〕、アラ、ム〔打方〕、アルメン〔腕〕、アーンセッテル〔玉竿〕、イン〔内ニ〕、ウイス〔拭ヒ〕、ウイスセル〔箒拭器〕、ウイーレン〔車〕、ヲイト〔出セ〕、ヲフィセコマンデル〔下知人ノスケ役〕、ヲフシールコンスタール〔石火矢打役人〕、カームルバンント〔室帯〕、カラウエン〔カスガヒ〕、カリーブルス〔大砲〕、カルデウース〔袋菓〕、カルロンナーデス〔短大砲〕、クーフート〔金手子〕、ゲシキユットランターレンス〔行燈〕、ゲスウインデラーディング〔早込〕、コーゲル〔玉〕、コップ〔頭ノ義〕、コップトフ〔頭綱〕、コロイトホールン〔口菓入〕、コロイトレーブル〔菓サジ〕、コロス〔臺〕、コンスタール〔石火矢打役〕、コンスタールマヨール〔石火矢頭人〕、サーイエエン〔毛織モノ〕、シカルニール〔積〕、シキトウアクテン〔不寝番人〕、シケーブスコック〔料理人〕、シユントガット〔火門〕、シーラツパンデン〔飾リ帯〔飾リ帯ノ義〕〕、シール〔魂ノ義〕、スコロートボス〔箱〕、ステユツケン〔砲〕、ストップ〔詰ヨ〕、ストルプ〔綱〕、スパーンセターリー〔跡綱〕、セイスチユツケン〔両脇板〕、セイターリス〔脇綱〕、セツトアーン〔サシ入ヨ〕、ソール〔底〕、ドロイフボル〔葡萄玉〕、バタイレ〔惣備筒〕、ハンドスバーク〔木手子〕、ヒュール〔火〕、フィシールフック〔規角〕、フィシーレイン〔規〕、ブラットロート〔板鉛〕、ポインテールン〔規〕、ポール〔セセリ〕、ボルストトウ〔胴綱〕、ボルストン〔胸ノ義〕、ポールデン〔船縁〕、モンディング〔口〕、ランゲスチユツケン〔長大砲〕、リングボウト〔輪頭釘〕、レイフ〔躰〕、レーブル〔菓匙〕、ロイムナードル〔セセリ〕、ロッフエル〔太鼓打〕、コルパールド〔臺〕、ロント

〔火繩〕

また意味または造語に至らなかったものをみると、ほとんどが直訳に近く、これでは砲術の予備的知識をもたなければ理解が困難であつたろう。

ウインドブロッペン〔風ノ栓〕、ウインドブロッペン〔筒口ノ木栓〕、エレファチー〔勾配ノ義〕、カ  
ラッセル〔コサギ道具・コサグ物〕、ケールブルーキング〔返リ綱〕、コウス〔鑄付アル輪〕、コロス  
〔厚キ底板〕、ストイトカラベン〔跡ニシザラサル様ニハムル道具〕、スベールロイムテ〔遊ヒノ空虚〕、  
スロットステュウンスル〔引金ヲ付ル処〕、スワルチェル〔黒キ繪具〕、バックル〔パンヲ焼者〕、ハッ  
トレイスポールト〔明リ窓〕、ハルケメント〔野牛又ハ羊ノ皮〕、ハルスバンド〔首ノ帯〕、ヒイシー  
ルスコット〔玉ノ行詰リ〕、ファルポールト〔砲窓ノ落シ戸〕、フィシールスコット〔規打ノ義〕、フィ  
シールレイン〔規筋ノ義〕、フルステルキングスバンドン〔強メ帯〔強メル帯ノ義〕〕、フルピンティ  
ングポウト〔クサル釘ノ義〕、ブロップ〔玉ゼキノ丸木短〔玉ゼキノ丸キ短木〕〕、ベウルトカステン  
〔替々勤ル役人〕、リコセッテン〔玉ノトベリ〕、ロイムナードル〔セセル錐〕

次いで、この『蘭法船戦火礮秘抄』の翻訳から程遠くない天保十二年（一八四一）に、やはり名村元義が訳  
した雅骨夫微尔木(J. W. Sesseler)の「Handboek ter Vervaardiging van Ernst-Vuurwerken. Delft. 1823」十二卷  
があり、これは『遠西火攻精選』または『遠西火工其精大全』として知られている。この年は、高島秋帆が武  
州徳丸原において西洋兵学の演練を公開したことにより、一躍洋式砲術への関心が高まったという時代の背景  
があつて、翻訳の巧拙は別として注目を浴びたようである。なお、この訳書は安政七年（一八六〇）に上絵の  
浅野敬徳が抄訳したものを『遠西火攻精撰摘要』の表題で出版しているので、これの訳語を〈〉内に参考とし  
て掲げ、『遠西火攻精選』の訳語とともに紹介する。

アススコップ〔灰カキ〕、アルティレイイ〔石火矢〕、インファンテリー〔士卒〕、インファンテリー  
パトローン〔歩卒火葉囊紙〕、ウレイフホウト〔播木〕、ウレープターフル〔播盤〕、エイゼレンフェ  
イセル〔鉄臼〕、エルセン〔柳〕、オンゲル〔凝固脂肪〕、ガス〔瓦斯〕、ガース〔絵絹〕、カノーン

〔石火矢〕、カメルルガーレン〔駱駝糸〕、ガラウウガーレンス〔灰色糸〕、ガラウリンネン〔灰色木綿〕、ガラナイトボイセン〔木管〕、カラベイン〔馬上筒〕、カランス〔箱繩臺〕、カリイフル〔砲口〕、カリイフル〔炮筒〕、カルンナデス〔短大炮〕、カロンナーデルス〔短臺炮〕、短火砲〕、カン〔器〕、キートル〔如露罐〕、ギートルレーブル〔鑄ヒ〕、クレイロースール〔鉄網〕、ゲウヲネロンド〔尋常火線〕、ゲズウインドベイビース〔迅速火管〕、ゲズウイントロンド〔導火〕、ゲズウイントロント〔葉線〕、ゲスボンネンカテヨーン〔草繩系カセ〕、ケテレンピスコロイトサック〔合和袋〕、ケートル〔鍋〕、ゲブレバレールサーグメール〔調製鋸木屑〕、ケムールスガーレン〔駱駝糸〕、コクト〔三脚子〕、コーゲル〔玉・丸・銃丸〕、コーゲルケネーブタント〔丸銃〕、コーゲルステラントハールントン〔磨丸桶〕、コーゲルフォルム〔玉鑄型〕、コーゲルマンデン〔丸籠〕、ゴム〔滑〕、コールシュール〔炭酸〕、コールン〔五穀酒〕、サアイ〔毛織〕、毛布〕、サーク〔鋸〕、サススコッフル〔木籠〕、サスレーブル〔火柴ヒ〕、サツケバント〔袋帶〕、サルベートルシュールロード〔硝石酸鉛〕、シエントヒュール〔導火〕、シュトルストフ〔酸素〕、シュンドルス〔導火柴〕、シリンドル〔筒形〕、スウイムブラッセン〔浮袋〕、スコイムスハンナー〔網杓子〕、スズッキストナ〔窒素〕、スタムブル〔棒〕、ステシイケル〔播モノ〕、ステーフスル〔糊〕、ステーンマンデン〔石籠〕、ストルムサック〔怒浪袋〕、スハンセセーブレ〔石鹼〕、スメールトケイトル〔溶解鍋〕、セインヒューレン〔合窓火〕、セーフトケイトル〔漉鍋〕、セリントルフォルミグ〔棒・杵〕、タス〔騾乱〕、ダライパンク〔轆轤〕、ダンブコーゲル〔濛氣丸・烟玉〕、濛氣彈〕、テイイブステムブル〔鑿〕、テッケン〔押込棚〕、テレグトル〔漏斗〕、デンネゴーム〔杉〕、トッフエルサーグ〔細工手鋸〕、ドーフポット〔火消壺〕、ドロイフエコーゲル〔葡萄丸〕、パツプ〔糊劑〕、ハスブル〔摺〕、ハツタメス〔斧〕、

パトローン〔洞葉〔火葉包〕〕、パトローンサック〔火葉袋〕、パトローンパツピール〔火葉袋紙〕、ハラルレル〔平行線〕、ハルスト〔指〕、ハルプ〔千石篩〕、ハルプ〔銅篩〕、パーレンケレート〔馬毛氈・馬尾織氈〕、バントエイスル〔鉄帶〕、ピストーレン〔短炮〔掌銃〕〕、ヒュスコロイト〔火葉〕、ヒュスコロイトサス〔細末火葉〕、ヒュルス〔紙筒〕、ヒュールタンク〔火箸〕、ヒュールベル〔火矢〕、ビンドカーレン〔繫糸〕、フィスレイム〔魚膠〕、フアルムスハブロック〔型臺〕、ブラントコーゲル〔焼丸〔猛燃彈〕〕、ブリッキドース〔罐〔鉄盒彈〕〕、ブリュススタンゲン〔火繩〕、ブルーブモルチール〔試火葉炮〕、ブルーフログ〔試験灰汁〕、フルール〔敷板〕、ブルールスバトン〔攪籠〕、フリースレイム〔肉膠〕、プロイムアロイン〔フクゲ明礬〕、フロック〔打盤〕、プローテン〔朴硝〕、ペイブイス〔管〕、ペイブイススラーゲル〔槌〕、ペイブイスフアルム〔作管型〔迅火管臺〕〕、ヘイル〔斧〕、ペインボーム〔杉〕、ヘーストル〔間木〕、ベッキ〔瀝青〕、ヘット〔脂肪〕、ヘルスポンプ〔竜吐水〕、ヘンニツプ〔麻〕、ヘンネンカクト〔驚翅管〕、ボイス〔木管〕、ボイセン〔管〔信火管〕〕、ボイセンスタンブル〔管棒〔信火管填葉杵〕〕、ボイセンテレッケル〔管抜き〕、ホウテンハームル〔槌〕、ホクトメートル〔驗液器〕、ホットアース〔木塩〕、ホームフレイラホラトリウム〔避火器製造所〕、ポルトパツピール〔厚紙〕、ポーレン〔錐〕、マストボーム〔帆柱樹〕、マート〔量器〕、ムートルローク〔母灰汁〕、メターレンフェイスル〔唐金臼〕、メールヒュルフル〔極末合成火葉〕、モウト〔麥酒〕、ヤグーコロイ〔獵火葉〕、ラスプ〔餃皮〕、ラット〔板〕、ラードスコップル〔火藥籠〕、ラゴレール〔火藥局〕、ランタールン〔火燈〕、リウネン〔定規〕、リウンスバーン〔手規木〕、リグトコーゲル〔光り丸・照明丸〔燭彈〕〕、リュッセントフ〔紐〕、リング〔丸頭環〕、リンデン〔榲〕、レイン〔繩〕、レソレメント〔試験表〕、ロイケンボーム〔落葉松〕、ローク〔灰汁〕、ローデンコー

ゲル〔鉛丸（鉛弾）〕、ロートカルク〔鉛石灰〕、ロートキステイー〔鉛丸箱〕、ロートツイクル〔鉛糖〕、ロルトルス〔真木〕、ロルフランゲ〔細工盤〕、ロント〔線〕

ハルストおよびゴムに〔楯〕〔盾〕の新字を造っているが、これは松脂およびゴムラテックスのことで、元義は先輩の製字を用いたと言っているがその典拠は不明である。また適当な用語が見当たらないため、直訳又は意識にとどめた箇所はかなりの数にのぼる。元義による新造語のうち熟語として幕末まで用いられたものが十指に満たないというのは、創造力の乏しさというより、意識で事が足りていた通常の翻訳業務と違って専門知識を要する技術書を対象にした難しさによるのであろう。そのことは次に掲げる直訳文をみればある程度観察しが付けられる。

アラルムスタング（「アラルム」ハ軍兵ヲ集ルノ義「スタング」ハ竿ノ義）、アルテレリイコロイト〔石火矢ノ火薬〕、オーフルデウツク〔覆木綿ノ義〕、ヨンドルオフヒシール〔頭役ノ次ノ人〕、オンベスラーゲネ〔釘鉸ヲ用ヒサル義〕、ウイローク（一名ハ「ゴムテイユス」大抵堅実ニシテ黄色ナル者ナリ是物燃ヘ易シテ且ツ燃力ノ強キ者ナリ）、ウエルキターフル〔細工スル盤〕、ウヤルブケンキェット〔砲ノ総名〕、ウリユグトウ〔締メ型ヲ付ル火矢用ルノ綱ノ義〕、ウレイフターフル〔物ヲ揺ル臺〕、ウレイフホウト〔臺ノ上ニテ火薬ヲ摺ル木〕、エンゲリスフロイン〔青キ画料ノ名〕、オリファンツファルマート〔象紙ノ義〕、カーセマッテン〔土ヲ以テ圓形ニ厚ク塗リタル土室〕、カッゲル〔火ヲ焚キ居室ヲ暖ムル器〕、カラツフルス〔刮ゲル器（剔滓子）〕、カラベイン〔馬乗ノ持筒（肩銃）〕、ギートレールブル〔鉛ヲ型ニ流ス匙〕、グルーイローストル〔焼ク金網ノ義〕、ゲウエーレン〔兵卒ノ筒（手銃）〕、ケートルス〔上口ノ鍋形ノ如クナル処〕、ゲレイティングスヒニルセン〔導火ノ筒〕、ケーレン〔歸ル義〕、コーゲルケネーフタング〔丸ノ鑄口ヲ切ル鉄〕、コーニングススタントル〔三ノ如ク立ノ義〕、

コーポラール〔「オフヒシール」ノ代ヲ動ムル役〕、コロア〔粗キ義〕、サス〔可燃体ヲ以テ製セシ者  
〔硝石・硫黄・木炭ノ三品ヲ摺合シタルモノ〕〔火薬〕〕、サスコップフルチー〔火薬ヲヨセル器械〕、  
サスバック〔細キ圓状「サス」入ル器〕、サスバックケン〔「サス」ヲ入ル、箱〕、サックバント〔袋ノ  
紐ノ義〕、サルベートルブレイケン〔硝石ヲ碎ク義〕、シカラীগ〔四ツ足ノ付タル臺〕、シケーフ〔筒  
キ一週平ナル石〕、シユンドルスタンプル〔「シユンドル」ヲ込ム棒〕、シリンドイリッセケツプ〔筒  
状ノ切り欠キ〕、スコイムスバーン〔泡沫ヲ抄ルカシ杓子〕、スコイムレーブル〔泡沫ヲ抄フ匙〕、スコ  
ロートボスセン〔古釘其外色々ノ者ヲ「ブリッキ」ニテ拵ヘタル器ニ入レ玉トスルモノ〕、スタンフル  
〔針穴ノアル棒〕、ストークゲレートスカッペン〔火ヲ焼クニ用ル具、直ニ煮ル器、火筋〔ひばし〕・  
火斗〔ひかき〕・火消壺・火吹筒〔ひふきだけ〕・大包丁・鋸・斧ノ類等平常竈邊ニ備フル者ナリ〕、  
スハンサーグ〔弦掛ケ鋸〕、スピッロドル〔先ノ尖リタル真木〕、スベールウエルキ〔火矢ノ頭ニ付  
ル物ノ義〕、セリントルフアルミグ〔筒状ノ義〕、タツプ〔切り欠キ〕、タトウク〔火薬ヲ煮ル場所〕、  
タラーゲサス〔柔緩ナル「サス」〕、ヂスラークネグトコーゲル〔絞釘付ノ光リ丸ノ義〕、チツテスル  
フ〔湿タル者ノ義〕、ディユツブルハーケン〔「スナツパーン」ノ類小ナル筒ノ一種〔大手銃〕〕、デ  
レーフサス〔流出ル「サス」〕、ドローラストフ〔乾キタル者ノ義〕、トロンムル〔篩ノ上下ヲ覆フモ  
ノ〕、ドントカランス〔未ダ火繩ニセザル綱〕、ナエイネ〔小ナル義〕、パトロネン〔火薬ヲ入ル、  
袋〔火薬包〕〕、パトロンキスチー〔「パトロン」ヲ入ル、箱〕、パーレンケレート〔馬尾織ノ數物〕、  
ハアーレンセーフ〔太鼓ノ形ヲ具タル馬尾ノ篩〕、パンクスクルーフ〔螺旋ヲ裝置シタル臺〕、ハンド  
ペイル〔柄アル包丁〕、ハンドリグトコーゲルス〔手ニテ擲ツ光リ丸ノ義〔手投燭彈〕〕、ヒュスコロ  
イトスコップ〔銅ニテ製シタル器火薬ヲ抄フニ用ユ〕、ヒュスコロイトバック〔粒ノ火薬ヲ入ル器〕、

ヒュールウエルケルスワーゲン〔火具ヲ運送スル車ノ意〕、ヒュールペールヒュルセン〔火矢ノ筒ノ義〕、ヒュールペイルフト〔火矢ヲ製スル臺〕、ピントガールン〔ク、リ付ル糸〕、ピントホウト〔糸ヲシメル具〕、フックインステニルメント〔四半圓ニシテ度ヲ付ケ度數ヲ測ル器〕、フュインコロイト〔細粒ノ火薬〕、フラグトマーテン〔液汁ヲ入テ量ル器〕、ブランドエイズル〔焼鉄ノ義〔腔鉄燃彈〕〕、ブランドコーゲルペンネン〔小サキ棒〕、ブランドサス〔焼ル「サス」〔燃彈火薬〕〕、フリユグケサス〔揮発ナル「サス」〕、フルカップ〔頭ヲ付ル事〕、ブルーク〔紙ヲ裁ニ用フル包丁ヲ装置シタル器〕、ブルーフモルチール〔火薬試ノ砲〕、フルールリップ〔ネダ板ヲ付ル木〕、ブレットモーレン〔押ツブス車〕、ブロック〔此ノ袋ヲ載セテ打ツ盤〕、ヘグチー〔台ノ内ニ針ヲ止ル処〕、ベスラーゲネスヒーケルス〔釘絞ヲ用フル者〕、ペーブル〔真木ニマキタル紙ヲシメル器ノ名〕、ベルカメント〔獸ノ薄皮〕、ボイセンスタムブル〔火薬ヲ込ム棒〔信薬填杵〕〕、ボイセンブロック〔管ニ火薬ヲ込ニ用ル盤〕、ホウテンモルレン〔火薬ヲ一味ツ、ル、器〕、ボムメンハーク〔輪「ボム」ヲ取り扱フニ用ル者〕、マストウヨルブ〔柱ノ如キ形ヲ云歟〕、マルレン〔型ヲ通シ試ル〕、ミュニティン〔軍用諸器ノ名〕、ラアツテン〔名ク切タル板ナリ〕、ラポレールベッケン〔火薬局ニ用フル処ノ鍋〕、ラーム〔糸ヲ張ル器械〕、ルールスパーン〔攪和スル器〕、レイデレンヒュスコロイトサツク〔皮ニテ製ス火薬ヲ碎末スル袋〕、レーブ〔革切レノ義〕

また意訳文もなく原語のまま用いられている例として、ガラナート、コロップ、スピークケルス、スブリッツ  
ホーローン〔器名〕、フラムボウウエン、ブリッキドーセン、ブリッキヒュール、フルキツト、ペイルラツ  
ン〔何ノ用ニナルヤ原本ニ不言〕、ポビニリーレンなどがある。少なくとも砲術に関する限り、元義にはカ  
ン、ホウキツツル、モルチール、ゲヴェールなど砲種を区別できるだけの知識があつたとは思えない。

例えば、第七卷のヒュールペイルについて、「此ヒュールペイルノ一篇ニテハ製作等詳ニ知レ難シ、雖然此一篇ヲ闕事不能故ニ已ム事ヲ得スシテ此ニ挙グ、其詳説ノ如キハ他ノ全書ヲ得テ此ニ述ヘシ、実ニ是一篇ハ譯稿トモ言ヘシ諸君子之ヲ恕シ玉ヘ伏而請。元義敬白」とあるように、この部分は特に難しかったようである。

本木正栄と名村元義による訳語を比べると、翻訳年代の早い『砲術備要』のほうが次の例のように訳語として熟しているといえるのは、語学力のある大槻玄沢や幕府鉄砲方の井上左太夫の協力があつたことを前に述べたが、元義の直訳ともいえる訳文からは、正栄のように強力な助言者がいなかったものと察せられる。このことから名村が砲術書の翻訳を命じられたのは、彼の翻訳力が優れていたというより、たまたま石橋・本木に続いて通詞の輪番に当たっていたという単純な理由に基づくものであつたと考えられる。

特別な翻訳については、家職としての面子があつて同役の通詞に協力を仰ぐなど考えられなかつたとみられ、つぎにあげる訳語の①は『砲術備要』、②は『蘭法船戦火礮秘抄』、③は『遠西火攻精選』を表す。

ウキッセル〔①銃箒、②箒拭器〕

カノン〔①大砲、③石火矢〕

カラッセル〔①雙牙鉤、②コソギ道具、③刮ゲル器〕

コーゲル〔①彈丸、②玉、③丸〕

コロイドマート〔①菓升、③量器〕

コロイトレーブル〔①菓匙、②菓サジ〕

スパーク〔①木槌、②木手子〕

モント〔①銃口、②口〕

類語が少ないため例とするのは適切でないかも知れないが、同役の通詞でありながら、訳語に共通するところ

ろがないのは、通詞の間にもそれぞれ家職として翻訳の流儀があったと考えざるを得ない。つまり『ボスシキ  
イテレイコンスト国字解』は石橋流のオランダ語翻訳術、『砲術備要』は本木流オランダ語翻訳術、また『遠  
西火攻精選』は名村流とするのは、一見乱暴な見方かもしれないが、そうでもなければ、同時代に長崎に居住  
してオランダ語の翻訳に際しては職分として共同任務に就いていたのに、単独の翻訳では共通する訳語がほと  
んど見られないことの説明がつかない。

『高島流砲術秘書』が悪文といわれるのも、兵学の専門家による翻訳ではなく通詞に頼ったためで、フォー  
ムが定まっている貿易用語を家業として継いできた伝統的職業翻訳職人の限界を示している。しかし、阿片戦  
争以後の国際情勢は、日本の防衛問題を専門知識がないとオランダ人に聞かなければ分からないと弁解を重  
ねるオランダ通詞に任せざるわけにはいかなくなっていった。それと時を同じくしてオランダ語を習得した医学者  
たちの好奇心の対象が時代の要請と共に広がりを見せ、天保年間を境にして世襲的権益の擁護に汲々とするオ  
ランダ通詞に代わって医学者による兵学書の翻訳が始まり、やがて軍事技術者による本格的なヨーロッパ兵学  
の紹介が行われるようになった。幕府もこの『遠西火攻精選』を最後として、オランダ兵学書の翻訳を通詞か  
ら天文方の語学者たちにシフトする。

銃砲史研究

平成六年六月十一日

銃砲史学会

東京都渋谷区神南一ノ一ノ一

社団法人

日本ライフル射撃協会

頒価 五百円

編集発行

発行